

2024年7月21日(日)

於：八千市立郷土博物館

八千代市郷土歴史研究会主催 歴史講演会「八千代の人々の生活史」

みほとけに花一輪 — 古代の萱田・村上に暮らした人々

蕨 由美

第Ⅰ部 古代の萱田・村上に暮らした人々

村上込の内遺跡は、1973～74年に村上団地造成に先立つ発掘調査で、竪穴住居跡164軒・掘立建物跡24棟が見つかり、古代(奈良～平安)の大規模な集落跡として注目された遺跡で、1989年開館の国立歴史民俗博物館では、古代村落の代表例として復元景観のジオラマとともに、瓦塔の破片模型なども展示された注目すべき遺跡です。

その後、1978～91年、新川西岸のゆりのき台の造成に伴う萱田遺跡群、1988～98年に東京成徳大学その周辺の上谷・栗谷遺跡の発掘調査が行われた結果、出土した墨書土器などによって、古代の「印旛郡村神郷」の範囲が村上地区から八千代市全域に広がっていたことがわかってきました。

萱田遺跡群・村上込の内遺跡の調査で分かった人々の暮らしは次のようであったと思われまます。

- ・村上と萱田の台地には、8世紀前半(奈良時代)から9世紀後半(平安時代)までの人々が生活する集落があり、「丈部」姓をもち、「印旛郡村神郷」に帰属していた。

- ・新川に流れ込む谷津には水田、台地上には畑が造られ、馬を飼い、鉄の農具を使って耕作していた。

- ・竈を備えた竪穴住居に住み、甑を使って調理し、土師器の甕や皿を使って食事をしていた。

- ・紡錘車を使い、布を織るための糸を紡いでいた。

- ・掘立建物や多量の墨書土器、官人が身に着ける石帯などが見つかったことから、文字を識る人がいた。

- ・手づくね土器や、人面墨書土器、神に捧げる墨書のある土器などから、伝統的な神祭りが行われていた。

- ・瓦塔、小仏像、仏鉢、「佛」や「寺」銘の墨書土器、須恵器壺、燈明具などの仏教関連遺物、また四面庇掘立建物の仏堂跡(推定)などが出土していることから、仏教が民衆に浸透していたことがわかる。

第Ⅱ部 萱田・村上の古代集落と出土した長頸瓶「壺G」のなぞを解く

長頸瓶「壺G」は、8世紀末から9世紀初めの遺跡から見つかり、形から「壺G」と分類されるスリムな須恵器で、その用途は、仏に供える花瓶、調味料を運んだ容器、東北侵攻の兵士が携えた水筒など諸説あります。

村上込の内遺跡・萱田遺跡群の北海道遺跡などから出土した壺G(図1・2)とその遺跡の様相から、壺Gの用途を考察してみました。

1. 須恵器「壺G」とは

壺Gは、静岡県の花坂島橋窯と助宗窯などで生産された長頸壺のことで、高さ20cm位の細長い形で頸が長く、堅牢で優雅な形をしつつも、ほとんどが平底で、糸切痕やクロ回転痕を未調整のまま残すなど、やや雑なことが特徴です。

奈良文化財研究所が、須恵器の壺の形状をアルファベット順に分類した際、「G類」に定められた須恵器であることから、「壺G」とよばれています。

器形は、太型・中太型・細型に分類され、中太型・細型は日本～関東～東海・近畿地方に広く分布しますが、細型の時期は784～794年の長岡京期に限定される特徴があります。

2. 壺Gの用途は？

壺G用途は、「堅魚煮汁容器説・水筒説・徳利説・花瓶説など諸説あって定まらない」とされてきましたが・・・

a. 「堅魚煎汁運搬容器」説

「荷札木簡の記述により、この壺の産地の駿河と伊豆から、長岡京へ調味料の堅魚煎汁を運んだ容器」という巽淳一郎氏の説*です。

*巽淳一郎1991「都の焼物の特質とその変容」『新版 古代の日本 近畿Ⅱ』角川書店

その後、関東から東北、海のない山梨県からも出土していること、またこの容器説に対し、瀬川裕市郎氏は「堅魚煎汁はゼリー状で、木製容器に入れたはずで、運搬に用いる必然性はない」と批判しています。

*瀬川裕市郎1997「堅魚木簡にみられる堅魚などの実態について」『沼津市博物館紀要』21 沼津市歴史民俗資料館・沼津市明治史料館

b. 「東北遠征兵士の携帯用水筒」説

「東北の城柵から少量の発見例があり、桓武朝における東北遠征にともなう兵士や都から下る官人の携行品である」という山中章氏の説*が有名です。

*山中章1997「桓武朝の新流通構造：壺Gの生産と流通」『古代文化』第49巻11号

2007年の国立歴史民俗博物館で企画展示「長岡京遷都一桓武と激動の時代」では、壺Gが長岡京とそのころの東北支配の拠点地と東日本で多く出土していることを強調、「特異な形式をもつ壺Gの移動に代表される物流の進展」という趣旨で、各地の壺Gが展示されました。

c. 仏事使用の花瓶（けびょう）説

「仏像が手にする金属製花瓶と同形で、これを模した。仏教の東国伝播に伴って、小さなお堂で使った仏具の花瓶」という佐野五十三氏の説*があります。

*佐野五十三 1998「須恵器花瓶の成立—仏の手から塔婆の世界へ—」『静岡県考古学研究』No.30

*佐野五十三 1999「壺Gの成立と伝播」『静岡県考古学研究』No.31

佐野氏は仏像・絵画などの資料に残る花瓶を検討整理する中で、観音像の持つ古代花瓶の形状と須恵器壺の変遷の関連を分析し、その形態と時期が一致することを指摘、仏の手を離れて自立式となり花活けの花瓶となった須恵器こそ壺Gであると述べています。(図3)

さらに「壺Gの成立と伝播」では、出土した遺跡と型別の分布の関連を整理し、「壺Gは、古代の公的な施設・機関に関係する遺跡が圧倒的に優位であること」、「集落からの出土も一般的」で、東国では竪穴住居から奈良三彩・金銅仏などが出土していることも指摘されています。

また2007年静岡県遺跡調査報告会で、千葉県袖ヶ浦市遠寺原遺跡・山梨県韮崎市宮ノ前第II遺跡、群馬県佐波郡十三宝遺跡の壺G出土の遺構と遺跡全体の様相を例示し、壺Gが村の寺や仏堂などの遺構に付随する遺物であると話されています。

3. 壺Gと仏教関連遺物が伴出した千葉県内の遺跡

「壺G出土遺跡一覧表」(山中章 1997)や『古代仏教系遺物集成・関東:考古学の新たな開拓をめざして』(考古学資料から古代を考える会 2000)のデータリスト、さらに最近の発掘調査報告などにに基づき、壺Gの出土した遺跡について伴出した仏教関連遺物や掘立建物などの遺構について調べてみました。

- ① 海神台西遺跡(船橋市) = 墨書土器「岑寺」
- ② 北海道遺跡(八千代市) = 墨書土器「勝光寺/大田」・「尼」・「経」
- ③ 井戸向遺跡(八千代市) = 仏鉢、三彩托、三彩小壺2、銅造宝冠如来像、山吹双鳥鏡、墨書土器「寺坏/寺」・「寺」・「佛」、火打金
- ④ 村上込の内遺跡(八千代市) = 仏鉢、瓦塔、灯明皿、火打金、墨書土器「聖」・「前

井」・「利多」

- ⑤ 庄作遺跡(芝山町) = 仏鉢、瓦塔、墨書土器「井/佛西」
- ⑥ 真行寺廃寺(山武市) = 仏鉢、浄瓶、香炉蓋、瓦塔、墨書土器「武射寺」・「大寺」
「仏工舎/小」、文字瓦「寺/寺口」
- ⑦ 柳台遺跡(匝瑳市) = 仏鉢、浄瓶、墨書土器「千俣口(仏カ)」
- ⑧ 台畑遺跡(千葉市) = 墨書土器「寺吉」・「寺」他
- ⑨ 南河原坂窯跡群(千葉市) = 仏鉢、水瓶、香炉蓋、高坏形香炉、墨書土器「堺寺/上」
- ⑩ 川島遺跡(富津市) = 水瓶、香炉蓋、高坏形香炉
- ⑪ 草刈遺跡(市原市) = 灰釉浄瓶、薬壺、佐波理製箸、墨書土器「草刈於寺坏」
- ⑫ 永吉台遺跡(市原市) = 四面庇建物、瓦塔、仏鉢、銅鏡、香炉蓋、墨書土器「土寺」・「田寺」・「山寺」・「寺」
- ⑬ 高岡大山遺跡(佐倉市) = 四面庇建物、銅鏡、瓦鉢、香炉、墨書土器「寺」・「佛」・「神」
- ⑭ 臼井屋敷跡遺跡(佐倉市) = 三彩托、総柱建物 遺跡復元想像図
- ⑮ 某作遺跡(市原市) = 墨書土器「奉家事」・「佛頭」・「作り寺」
- ⑯ 谷津貝塚(習志野市) = 瓦塔片、灯明皿、墨書土器「中村寺」

これらの遺跡の中でも⑪の草刈遺跡の壺Gは、K370住居から、浄瓶や薬師如来の持つ薬壺など多くの遺物と共伴して出土しています。

またこのほか、墨木戸遺跡(酒々井町)・駒形遺跡(千葉市)・根崎遺跡(千葉市)からも、壺Gが出土しています。

4. 萱田遺跡群にみる古代仏教の跡

「村神郷」内の複数の集落を構成する萱田遺跡群の白幡前遺跡には、溝で囲まれた四面庇の建物があり、瓦塔・瓦鉢・浄瓶・「寺」や「佛」墨書土器などの遺物が集中することから、ここには集落全体の「村寺」といえる仏教施設があったとされます。

寺谷津の北側の井戸向遺跡からは、仏鉢・三彩小壺・銅造宝冠如来像・墨書土器「寺」・「佛」などが出土し、ここには一族の持仏堂があったと推察されています。

さらに北側の北海道遺跡では「勝光寺」の墨書土器が出土しています。『八千代の歴史 通史編』(2008)では、萱田遺跡群では白幡前遺跡の「村寺」を拠

点として単位集団ごとに仏教信仰が浸透していき、北へ離れた北海道遺跡から権現後遺跡にかけては次第にその跡も希薄になると考察されていますが、北海道遺跡と井戸向遺跡から出土した壺 G を付け加えることにより、ムラの中のやや離れた小集落にまで広く仏教信仰が浸透していたとも考えられます。(図 4)

5. 村上込の内遺跡の古代集落の様相

古代の村上込の内遺跡は、8 世紀前半～9 世紀後半の約 150 年間の集落遺跡です。8 世紀前半という時期は、養老 7 年 (723) 「三世一身法」の施行により、郡司層による開墾が進み始めたころでした。

この時期の住居跡 155 軒と掘立式建物跡 24 棟は、集落中央の住居のない広場の周りに、A～E まで 5 つのブロックに分かれて展開します。

墨書土器は 270 点にのぼり、同じ文字の土器がブロック単位でまとまって出ていることから、一族のような単位集団が何世代かにわたりおなじブロックに住み続けたと推定され、8 世紀後半から 9 世紀前半にかけて最盛期となり、10 世紀頃には生活の痕跡が消えてしまいます。

6. 村上込の内遺跡で仏教に関連するモノは？

村上込の内遺跡の調査報告書の遺物と遺構を再検討して、あらためて仏教関連と思われる遺物を探し、遺跡のブロックごとに分析してみました。(図 5)

- ・ A 群＝瓦塔片・墨書土器「前卍*」「奉」・長頸瓶・仏鉢 (瓦鉢)・掘立建物 3 棟
- ・ B 群＝灯明皿
- ・ C 群＝長頸瓶 (大型の胴部)・掘立建物 4 棟
- ・ D 群＝長頸瓶壺 G のほか、長頸瓶破片が数点、灯明皿、墨書土器「聖*」、掘立建物 13 棟
- ・ E 群＝掘立建物 4 棟・火打金・墨書土器「利多*

* 「前卍」は、「菩薩の前に」の意味。 * 「聖」は、「釈迦、または仏法の徳を秘めた聖人」の意味。

* 「利多」は、「自利利他の善事」の「利他」(『東大寺諷誦文稿』)

さらに壺 G 出土の D 群の遺跡の様相を図にすると、出土ピットに隣接した 093 住居跡に墨書土器「聖」など仏教関連遺物が多いことがわかります。(図 6)

以上の結果、村上込の内遺跡の仏教施設は、A～E のどの群にも属さない北はずれの

瓦塔が集落全体の礼拝対象であっただけでなく、集落全体を率いる D 群の有力者一族の単位集団内にも、持仏堂のような施設があったのではないかと考えられます。

7. みほとけに花一輪 — 花瓶「壺 G」説のまとめ

壺 G の用途について、その特徴をまとめてみました。

- ① 壺 G は、密栓しづらい口の形、内容量、器の重さなどから、運搬用容器には適さない。
- ② 観音像の持つ花瓶と須恵器壺の変遷の中で、壺 G の形が古代花瓶の形態に類似する。
- ③ 壺 G の出土遺跡からは、仏教に関連する遺物(「寺」「仏」などの墨書土器・浄瓶・香炉・灯明皿・瓦塔・仏鉢・火打金・三彩壺・小仏像など)も検出されている。
- ④ 8 世紀後半～9 世紀は、東国開発と民衆レベルの仏教の急激な拡大の時期で、壺 G の分布に一致する。

以上、壺 G が仏像の持つ花瓶にその形状が一致するという佐野氏の説に着目し、村上込の内遺跡など千葉県壺 G 出土遺跡の調査データを検討してみた結果、この地域においては「壺 G は仏具としての花瓶」説が、最も妥当であると思われました。

8 世紀後半から 9 世紀の壺 G の伝播は、民衆レベルの仏教の急激な拡大と東国の開発の促進が背景にあります。(『静岡の風土と風と私』佐野 2005)

今後の遺跡分析の視点に仏具である壺 G を加えることによって、8～9 世紀の集落内の信仰形態について、村上込の内遺跡などの出土遺跡の性格がより明らかになると考えます。

なお、2023 年 10～12 月巡回展「流山新市街地地区の遺跡展」(主催：千葉県教育振興財団)での八千代市立郷土博物館での展示では、「八千代の古代仏教」コーナーに村上込の内遺跡と北海道遺跡出土の壺 G2 点が並べて展示されていました。

また「2023 年 11 月～2024 年 3 月特別展「幸福を祈る-古代人の願いと造形」(主催：千葉市教育振興財団)での展示では、千葉市の駒形遺跡・台畑遺跡・南河原坂第 6 遺跡の壺 G3 点が仏具の「花瓶 (けびょう)」のキャプションをつけて、展示されていました。

やっと、長頸瓶壺 G が、みほとけに花一輪供える花瓶として、認められつつあると確信できました。

【参考資料】 藤由美「村上込の内遺跡と同遺跡出土の長頸瓶 (壺 G について)」『史談八千代』38 号 (2013)

図1. 村上込の内遺跡の壺G

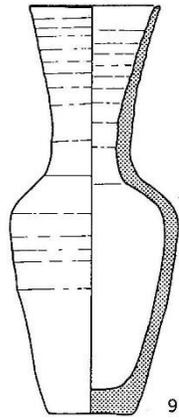


図2. 北海道遺跡の壺G

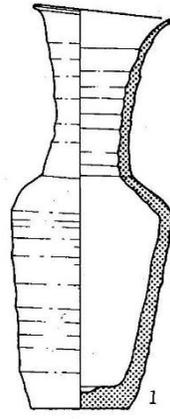


図3. 観音像の持つ花瓶と須恵器壺

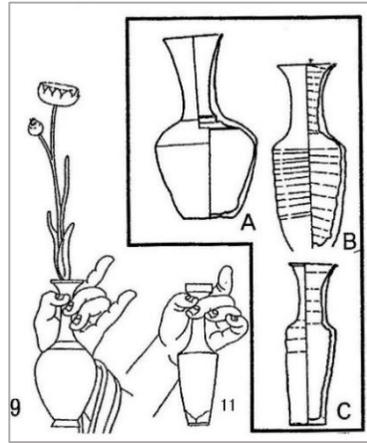


図5. 村上込の内遺跡の遺構と仏教関連遺物

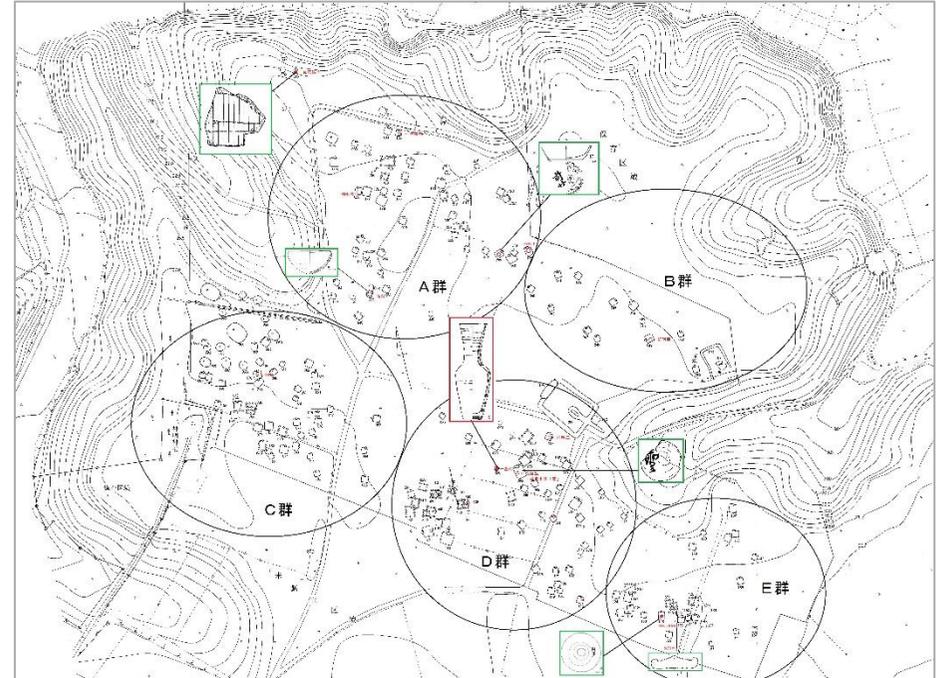


図4. 萱田遺跡群の遺構と仏教関連遺物

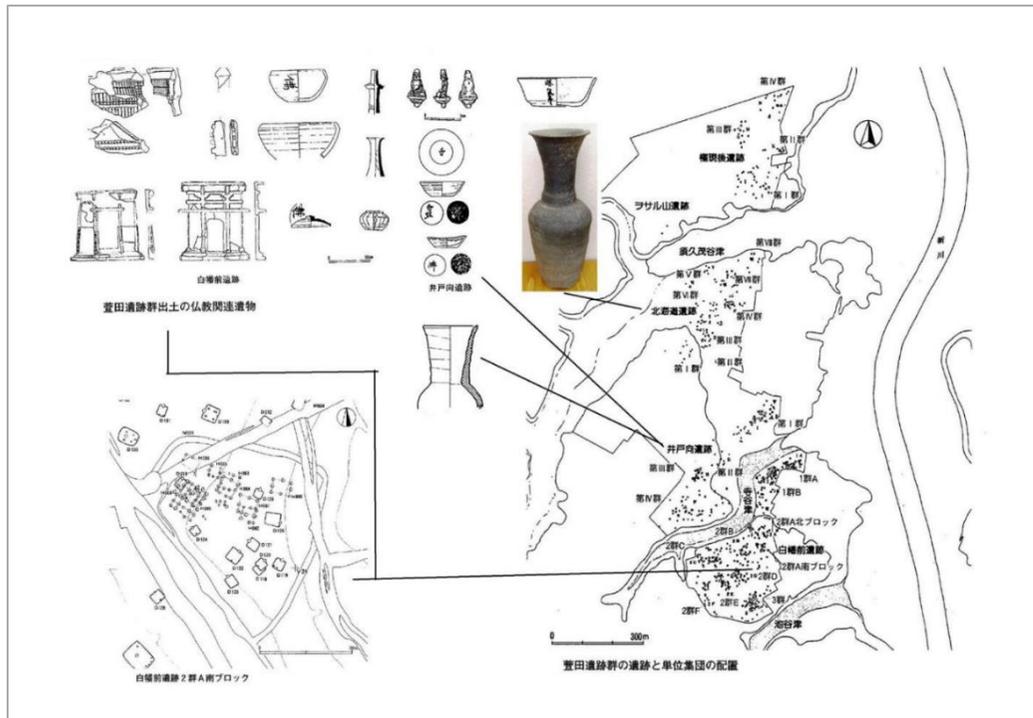


図6. 村上込の内遺跡のD群の遺構と仏教関連遺物

